

# EBA 水俣フィールドワーク 2018 報告書

環境情報学部 准教授 植原啓介

## 1. 概要

慶應義塾大学では、2012年より ASEAN の 6 ヶ国 8 大学と協定を結び(一部は途中参加)、学生のモビリティを促進するとともに、互いの学生を教育し合う活動をおこなっている。この一環として、慶應義塾大学から日本の学生 5 名、留学生 3 名、ASEAN の大学の学生 7 名が参加し、7 月 31 日 (火) から 8 月 3 日 (金) に水俣フィールドワークを開催した。フィールドワークでは、水俣病発生からの経緯はもちろんのこと、水俣における街づくりの現状調査、水俣高校の生徒とのワークショップなどを実施した。最終日には、参加者はグループに別れて水俣で学んだことを踏まえた水俣市への提案を取りまとめ、ポスターを作成、ポスターセッションを実施した。

## 2. 日程・場所

水俣フィールドワークの日程および行程は下記のとおりである。

開催日時: 2018 年 7 月 31 日 (火) ~2018 年 8 月 3 日 (金)  
開催場所: 熊本県水俣市  
宿泊場所: 湯の児 海と夕やけ (〒867-0009 熊本県水俣市大迫 1213)

## 3. フィールドワーク内容

### 3.1. 2018 年 7 月 31 日 (火) の活動

はじめに、小林光特任教授より、「Businesses that pollute don't produce economic benefits」水俣病の背景、歴史、現在の問題などと行政としてどのように対応していくことが必要かについて講義をおこなった。その後、「水俣病の発生と国水研の役割」というテーマで、国立水俣病総合研究センターの原田様から、水俣病の発生、社会における水俣病への対応、水銀条約、国立水俣病総合研究センターの現在の活動などについてご講義を賜った。また、水俣病胎児性患者で語り部でもある永本賢二氏より、ご家族の様子、現在の水俣病患者の生活とその思いなどについてお話を伺った。その後は、水俣市が水俣病学習のために運営する水俣病資料館、国立水俣病総合研究センターが一般市民への情報提供のために運営する水俣病情報センターを見学した。水俣病資料館では、草野副館長の案内で水俣病発生前の水俣の様子、水俣病発生後の対応、水俣の現状と願いなどについて学ぶ機会を得た。

### 3.2. 2018年8月1日（水）の活動

午前中は、水俣市でダイビングショップを営む森下氏より、現在の水俣の海の様子についてお話を伺った。水俣市の海は安全宣言がされた1997年以降、豊かな海として復活しており、特にフィールドワークで宿泊しているホテルの前の海は、世界有数のタツノオトシゴの産卵地となっているとのことであった。その後、胎児性水俣病患者などが集う共同作業所であるほっとはうすを訪問し、胎児性水俣病患者の話をお伺いした。その後、患者らと共に押し花を使った葉を作成するワークショップを行った。

午後は、まず、瓶のリサイクル事業を展開する田中商店を訪問し、リサイクル工場を見学した後、田中専務から瓶のリサイクル事業を展開するまでの経緯とリサイクルの仕組みに関して説明を受けた。その後、水俣市最大の企業であり、水俣病の原因企業であるチツソから事業を引き継いだJNCの水俣工場を見学した。JNC水俣工場の生い立ちの説明、現在の製品の紹介などを受けた後に、バスで工場内を見学した。また、水銀を含むヘドロや水銀汚染された魚介類などを埋めて作った埋立地であるエコパークを見学した。

### 3.3. 2018年8月2日（木）の活動

午前中は、水俣市久木野地区にある愛林館を訪問し、沢畑館長の案内の下、久木野地区の森林の状況を調査した。また、午後は、俣高校の高校生を交えて「水俣環境デジタルアート」ワークショップを水俣高校にて実施した。今年度は水俣高校の方で企画していただいた空き缶風鈴を作成した。途中、田舎学校に参加する小学生らの見学などもあった。

### 3.4. 2018年8月3日（金）の活動

3つのチームに別れて水俣で学んだことを踏まえた水俣市への提案を取りまとめ、ポスターを作成した。また、午前中に作成したポスターを使い、午後はポスターセッションを行った。セッションでは、はじめにポスターを説明し、教員や参加者からの質問に答える形式でおこなった。また、発表には国立水俣病研究センターの方も2名参加していただいた。

## 4. まとめ

4日間のフィールドワークを通じて、学生たちは水俣の教訓を学ぶとともに、環境に関する現在技術や政策、街づくり活動などについて学ぶことができた。本フィールドワークに参加したのは、将来ASEANを背負って立つことが期待されている学生たちと、慶應義塾で共に学んでいるメンバーである。国際色豊かなメンバーと共に水俣でフィールドワークを行った経験は何事にも代え難く、彼ら彼女らの将来に役立つであろう。研究会から参加した学生は、水俣の現状に触れることができ、今後の研究テーマの設定などに活用されるものと考えている。